

『ブラジャーをする男！』  
〜柳原課長の場合〜

竹村直久

登場人物

柳原徹夫 (54) 素泉食品株式会社企画販売課長。  
素泉正一 (62) 同 社長。  
牧崎透 (48) 同 専務。  
新谷英悟 (26) 同 企画販売課社員。  
中条令子 (31) 同 同。  
須賀美代 (29) 同 同。  
加藤由里 (25) 同 同。  
河橋好彦 (27) 南西デパート企画渉外部長。  
篠田晃 (52) 同 常務。  
大沢雅樹 (46) 株式会社光フーズ社長。  
滝 静加 (36) 婦人警官。

舞台は素泉食品株式会社（資本金一千万円。従業員30人程度）の会議室である。

上手にドアがあり、人物の出入りは全てここから行われる。

壁には『安くて美味しい、安心して栄養満点！ 素泉食品の幸多（こうた）弁当』と書かれたポスターが何枚も並べて貼られている。

舞台中央から上手と下手に向かって会議用のテーブルがハの字型に並んでいる。

テーブルの上に内線兼用の電話機がある。

テーブルにはそれぞれ椅子が配置されている。

素泉正一（62）がボトルを手に、柳原徹夫（54）の手にしたグラスにワインを注いでいる。  
二人とも着古した感じの既製品の安っぽいスーツを着ている。

柳原「いや、社長、昼間からコレはまずいでしよう。これから大事なプレゼンテーションもあるってのに」

素泉「良いんだ。私はね、嬉しいんだよー柳原君（笑う）」

素泉もグラスを手に取り、柳原に注いで貰う。

柳原「いーのかなあ、こんな（と言いつつ嬉しそうに注ぐ）」  
素泉「それじゃ、カンパニー」

チンとグラスを合わせる二人。

素 泉「（飲み干し）おめでとう柳原君。ようやく君の努力が実る日が来たね」

柳 原「いや、何とお礼を言ったら良いか、社長が私を拾って下さったお陰ですよ。長い間ありがとうございました」

素 泉「コレは我が社にとって歴史的な出来事になるだろう。今まで門前払いで商談にも応じてくれなかったあの南西デパートが、実に20年振りに我が社との取引に応じてくれると言ったからなあ。しかもわざわざ先方からコンタクトを取って来るなんて、願ってもみなかったことじゃないか、余程君の作った幸多弁当が気に入ったとみえるな」

柳 原「はあ、先方の担当者が偉く乗り気になってくれました」

素 泉「聞けばその担当者と言うのは先代のお孫さんの好彦さんだと言うじゃないか」

柳 原「はあ」

素 泉「いや、私は驚いたよ」

柳 原「はあ……」

素 泉「河橋会長が生きている間は一度も商品を入れさせて貰えなかったのに。会長が亡くなったので旗色が変わったと言うことかな、しかしこれをきっかけに南西デパートとの取引が開拓出来れば、これ程のチャンスはない。時期社長に就任する好彦さんとのパイプが出来れば、ずっと南西デパートとの関係を保って行けるからなあ」

柳 原「はい、我が社のアピールにもなりますし、今回の全国お弁当フェアにおける幸多弁当の出荷数が安定して行けば、きっと銀行の融資も再開して貰えると思います。そうなれば行く行くは工場を増設することも夢ではありません。長年続いた業績不振を挽回することが出来ますよ」

素 泉「まさに一発逆転のチャンスだ。ふっふふ、やったな。コレにはまさに社運が掛かっている（とポスターを見る）」

柳 原「私もこれで、少しでもご恩返しをすることが出来れば言うことはありません」

素 泉「商売は何よりお客様があつてのこと。利益を落としても品質を落としてはならない。と言う君の親父さんに叩き込まれた経営理念が、やっと実を結ぶ時が来たのかもしれないねえ。いや、苦しい経営を強いられても守つて来た甲斐があつたと言うもんだよ」

柳 原「はい……」

二人しみじみとワインを味わう。

素 泉「ところで君、南西デパートの好彦さんとは打ち合わせで何度も会つてゐるんだろう」

柳 原「はい……」

素 泉「それじゃ、そのことも？」

柳 原「いえ、それは……」

素 泉「ん？ どうして？」

柳 原「いや、それは、やはり……」

素 泉「なんだ、私はもしかしたら好彦さんの方でも承知の上でのことかと思つてたんだが」

柳 原「さあ、それはどうでしょうか。少なくとも私の方からはなんとも……」

素 泉「そうか、でもいずれは？」

柳 原「はあ、でもそれは、やはり約束ですので」

素 泉「（驚き）おやまあ、ふっ（笑）そうか、いや、全くもつてそれも君らしいな、はっ

はっはっは……だがねえ君、もうそれも、神様はお許しになつてゐるんじゃないのかね」

柳 原「はあ……」

ドアが開き、牧崎透（48）が入つて来る。

牧崎も素泉や柳原と同じ、既製品の安っぽいスーツである。

牧崎はドアを開いたまま支える。

牧崎「どうぞ大沢社長様、お入り下さい」

牧崎に促されて大沢雅樹（46）が入って来る。高級そうな、でも趣味の悪いスーツに身を包み、手には光物。素泉食品とはいかにも格が違うと言う雰  
囲気を漂わせている。態度も横柄である。

牧崎「社長、光フーズの大沢社長様がいらして下さいました」

大沢「どうも、邪魔するよ（見て）おや、真昼間からワインとは粹ですなあ」

素泉「ああ、どうも（と大沢に会釈し）牧崎君。折角だが、もうその話は無かったことにして貰おうと思ってるんだが」

牧崎「えっ、何故です」

素泉「光フーズさんとの業務提携よりも、私は南西デパートの

お弁当フェアの方に賭けてみたいと思ってるんだ」

牧崎「社長、幸多弁当のブームなんてのはほんの一次的な物ですよ、今は良くても先々のことを考えれば、光フーズさんと提携する方が得策であるに決まっています。それで無くとも今の経営状態ではあと1年も持たないと税理士さんも仰ってたじゃありませんか。そんなことで本当に乗り切れるとでもお考えですか、流行なんて所詮は一過性の物ですよ。コレが売れなくなればもう先はないんですから。ここは有力な同業企業である光フーズさんとタイアップして、経営難を乗り切るべきです」

大沢は素泉と柳原が飲んでいたワインを勝手に注いで味見している。

素泉「しかしね君」

大沢「社長さん、うちはお宅の負債もひっくるめて面倒診よう

と言ってるんだ。決して悪い話じゃないと思うがね。私  
が思うにお宅の経営方針は欲が無さ過ぎる。つまりお人  
よし、甘いんだ。企業は利益を追求して何ぼでしょう。  
うちがテコ入れして見違える様に業績を上げてあげます  
よ」

素 泉「……（牧崎に）しかし君、あの南西デパートさんの方か  
らわざわざうちにコンタクトを取って来てくれたんだよ、  
それを棒に振るなんてことは考えられないじゃないか」  
牧 崎「例え南西デパートのお弁当フェアで全国販売が実現し  
たとしても、それはあくまで限定販売であって、一時的  
なことじゃないですか。例え地方の支店で好評を得たと  
しても、常時販売しているのはうちの一店舗だけなんで  
すから、全国的なヒットにはなりません。たった一店舗  
から支店を増やして行くなんて、何十年かかるか分から  
ないじゃないですか。それに幸多弁当の人气がそれほど  
長続きするとも思えませんし。そんな甘い見通しに社運

を賭けてしまっても良いのでしょうか、せっかく地元から  
火が点いたブームが来ると言うのに、このチャンス  
を逃がしたらそれこそ取り返しの付かないことになっ  
てしまいますよ。ですからここは、光フーズさんとの業務提  
携を結ぶべきだと申し上げているんです」

大 沢「そくだよ社長。こんなビジネスチャンスを逃す手はない  
ぜ、しかし幸多弁当はこのままのレシピでは大量生産し  
て全国展開するのは無理だ。もっと食材を低価格で集め  
やすい物にして、コストダウンを図る必要がある。幾ら  
品質を落としたからって幸多弁当と言うブランドさえあ  
れば絶対売れるんだからよ」

素 泉「しかしね君、コレは柳原君が長年かかって作り上げた……  
……」

柳 原「（素泉に）社長」

素 泉「何だね」

柳 原「もし社の方でそう言う方針で行くと言うことであれば、

私のことはお気になさらないで結構ですので、本当に、会社の為に一番良いと思われる方法を選んで下さい」

素泉「バカ者！何を言っとるんだ。君は自分の作った弁当に誇りを持ってたんじゃないのか、君の精神はその程度か？ そんなことなら最初からそんな物はやめちまえばいいんだ！」

柳原「はあ……」

牧崎「社長、コレが光フーズさんの方で設定して頂いた大量生産型のレシピです」

と素泉にレシピを渡す。

素泉「（見て）ふん、コレでは幸多弁当の趣旨が変わってしまふ。こんなに品質を落としてまでも儲けたいと言うのなら、やめてしまった方が良い」

牧崎「そんな……」

素泉「見てみたまえ（と柳原に渡す）」

大沢「それじゃ聞きますがね社長さん。アンタがやりたいのは慈善事業なんですかい？ それともビジネスかい？」

柳原「私は自分の仕事がしたいだけだ」

大沢「アンタ会社の将来を考えたことあんのか、経営者なら従業員たちに対して責任があるだろう。このままじゃ間違はなくこの会社は潰れるぞ、そうしたら従業員全部路頭に迷わせることになるんだぞ」

素泉「うちは品質と、お客様との信頼関係でやって来たんだ。今更そんな儲け主義に走るつもりはない」

大沢「ふん、その経営方針でやって来た結果が、大きく膨らんだ負債を抱えて危機的状况を迎えてるんじゃないか。いくら理想を掲げてたって、会社が倒産しちまえば何もかも終わりなんだぞ」

素泉「何と言われようと私はこの、柳原君の作った幸多弁当に社運を賭けてみたいと思っている」

大沢「ちっ、そのガンコ頭あどうにかならねえのか」

牧崎「社長。聞けば柳原課長は昔自分で経営していた仕出し弁当屋を倒産させてしまったことがあると言うじゃありませんか、そんな人の考えを優先させてしまったら我が社も本当に倒産してしまいますよ」

柳原「……」

大沢「うちなら全国に販売先のルートを持つてるから、南西デパートの祭事なんかよりも強味がある。限定販売なんかしたって宣伝にはなるかもしれねえが、利益は上がらねえ、悪戯に南西デパートの客寄せに利用されるだけなんだけ。それより量産してコンビニやスーパーに全国展開して、大きく儲けた方が良いじゃねえか」

牧崎「柳原さん、光フーズさんとの提携が成った折には、貴方にも重要なポストに着いて頂くことをお約束しますよ」

柳原「社長はどうなるんです」

牧崎「それは……」

大沢「実はなあ柳原さん。俺んここで既に素泉食品の株式の20パーセントは抑えてあるんだ」

柳原「何だって！」

素泉「……」

大沢「良いか、それに牧崎専務の持ち株を合わせりゃあ25パーセントの株式を取得していることになる。そうなればこっちは株主総会で一番の発言権を持っていることになるんだぞ」

柳原「それはどう言うことですか」

大沢「つまりだ。今後は社内の人事に関しても、俺たちの影響力を無視することは出来ないってことだよ」

柳原「そんな、貴方たちまさか、社長を退陣させようなんて」  
大沢「そんなことはまだ言ってるねえ。ただ、これからはお互い協力して仲良くやって行きましようやってことだよ」

柳原「それじゃまるで脅迫じゃないか」

大沢「そんな人聞きの悪いこと言ってる貰っちゃ困るねえ」



柳原「だって貴方」

大沢「そもそもここまで会社の負債を膨らませちまったのは社長  
長の責任だろ。そろそろ退陣して頂くと言うのも選択肢  
だと思いがね」

柳原「何だって！ 業務提携なんて名ばかりで、これは事実上  
の乗っ取りじゃないか。牧崎さん、貴方は汚い人です。  
どうせ合併した後は自分だけ有力なポストかなにか約束  
されてるんでしょう」

牧崎「うっ……」

柳原「私は社長に恩がありますから、そんな裏切る様な真似は  
出来ません」

牧崎「だけどねえ柳原さん。そんなことを言っていては社長と  
一緒に沈没することになりかねませんよ」

柳原「貴方だってこの会社で長年お世話になって来たんじゃない  
いですか」

牧崎「長年の恩義に報いる為だからって、自分の人生を棒に振

ることはないじゃありませんか。自分の為にもっと上を

目指して行くと言うことがそんなにいけないことですか」

柳原「貴方みたいな卑怯な人は見たことがない」

牧崎「……ふん、柳原さん、自分の企画した弁当がちよつとヒ  
ットしたからって、あんまりいい気になってると、ひい  
ては自分の首を絞めることになりますよ」

柳原「……」

素泉と柳原。牧崎と大沢の二組に分かれて睨み合う  
構図になる。

大沢「（牧崎に）おい、お前絶対大丈夫だなんて言っというて、  
大分話が違うじゃねえか」

牧崎「はあ、ご心配なく、大丈夫です。必ずなんとかいたしま  
すので」

素泉「大沢さん。もう貴方とお話することはありませんな。お

引き取り願えますかな」

大沢「出て行けと言うのか」

牧崎「そんな、社長……」

素泉「貴方が出て行かないと言うのなら、私が失礼しますよ」

とドアの方へ向かう。

牧崎「ちょっと待って下さい社長」

大沢「アンタ後悔するぞ」

素泉がドアに近付いた時、バーンとドアが開いて新谷英悟（26）が駆け込んで来る。やはり既製品の少しサイズが合っていないスーツを着ている。

素泉「何だ？」

新谷「あっ、課長、助けて下さい！」

と走って柳原の後ろに隠れる。

新谷を追ってOLの制服を着た中条令子（31）須賀美代（29）内藤由里（25）の三人がドタドタと駆け込んで来る。

由里「課長、新谷を捕まえて下さい！」

柳原「何だね、何事だ？」

由里「聞いて下さい。女子寮から私たちの下着を盗んでた犯人が、新谷だと言うことが判明したんです」

新谷「違います。そんなの嘘です」

由里「嘘じゃありません！」

柳原「どう言うことだ？」

新谷「違います、僕じゃないって何度言っても信じてくれないんですよ、助けて下さい課長」

由里「前から怪しいと思ってたんです。女子寮には他の課の人たちだっているのに、何で私たちだけが被害に合わなきやならないんですか。考えてみたら犯人は私たち三人のことをよく知ってる人に違いないと思って、新谷のこと見張ってたんです。もしたら見て下さいコレ（と携帯を見せる）携帯でこっそり私たちのこと写してたんですよ」

新谷「だから違うってそれは……返せよ」

と由里の手から携帯を奪おうとするが、由里は身を交わして逃げ、柳原に携帯を渡す。

由里から受け取って携帯の画像を見る柳原。

由里「それに昨日、寮の管理人さんが私の部屋のベランダから飛び降りて逃げて行く犯人を目撃したんです。その背格好って言うのが身長〇〇センチくらいで体格は（新谷に一致する体型）だったって言うんですよ、それって新谷

にピッタリじゃないですか」

柳原「（令子に）中条君、それは本当なのか」

令子「はい、管理人さんは追いかけたのですが、逃げられてしまったと言うことです」

由里「管理人さんはお爺ちゃんだから走るのが遅かったんです」

柳原「（由里に携帯を返し）それは昨日の何時頃のことなんですか？」

由里「ちょうど昨日新谷が営業に出ている会社にはいなかった時間です」

令子「新谷君はナガトミスーパーに行っていたと言っているのですが、先方に確認してみたところ、現地には10分くらいしかいなかったと仰っています」

柳原「何？」

新谷「でも僕女子寮になんか行ってないですよ」

柳原「それじゃ何処に行ってたんだ？」

新谷「すみません。ちょっと、パチンコ屋で……」

柳原「それを証明出来る人はいるのか」

新谷「そんなのいる訳ないじゃないですか」

由里「嘘ついてるんですよ。新谷が犯人に決まっています」

新谷「冗談じゃないですよ課長」

由里「もう、ピンクのワコールの2ピース返してよっ！ まだ

一度も着けてなかったのにっ！」

素泉「ちょっと待ちなさいよ君たち、あまり軽はずみなことを

言うもんじゃありませんよ、我が社の中に下着泥棒なん

ぞする人間がいるとは思えない」

牧崎「そうですよ、それにもしこれが警察沙汰にでもなれば、

マスコミに嗅ぎ付けられて騒ぎになるかもしれないじゃ

ありませんか」

令子「既に警察には連絡しましたので、まもなく来て下さると

思います」

牧崎「何ですって！ どうしてそんな早まった真似をするんで

すか」

由里「だって、私たちすっごく怖かったですよ」

素泉「君たち、今日がどんな日なのか分かつてるのか、南西デ

パートさんの担当者と重役さんが契約に見えるんだぞ。

会社の命運のかかった大事な日だと言うのに、こんなこ

とをしてる場合じゃないじゃないか」

令子「お言葉ですが社長。私たちもそれどころではありません。

ここ数ヶ月間連続して下着泥棒の被害にあい、正体の見

えない犯人の恐怖に怯える日々を過ごして来たんです」

由里「私なんて新発売の2万円もするブラジャーだったのにい、

最初に洗って一度も着けてないのに盗まれたんですよ（

新谷に）ちょっと、返してよう」

新谷「だから違うって言うてるじゃないか、課長、何とか言っ

て下さいよ」

柳原「本当にお前じゃないのか、ならば今日帰りにお前の家ま

で行って家捜ししてもいいか。それでもし盗んだ下着が

出て来たら、もう言い逃れは出来ないぞ」

新谷「何で僕がそんなことされなきゃならないんですか、課長まで僕を疑うなんて酷いですよ」

柳原「女性の下着を盗むだなんて、俺はそう言う卑劣な奴が一番許せないんだ」

由里「うわーさすが柳原課長。もうホントに頼りになるう、ステキい」

新谷「酷いですよ課長（泣く）」

テーブルに置かれた電話機が内線の呼び出し音を発する。

受話器を取る令子。

令子「はい会議室です。はい、はいお願いします（受話器を置く）今警察の方がお見えになりました」

牧崎「何ですって」

新谷「何だよもうマジ勘弁してくれよお……」

ドアが開き、婦人警官の滝静加（36）が入ってくる。

静加「磯壁署の生活安全課です。通報された方は何方ですか」  
令子「私です。企画販売課の中条と申します（と名刺を渡し）この人が容疑者の新谷英悟と言う者です、宜しくお願い致します」

新谷「何だよ容疑者って」

静加「（見て）新谷さんですね」

新谷「そうですね、でも絶対に僕は犯人じゃありません」

静加「任意同行を求めたいのですが、詳しい話は署の方へ行ってお聞きします」

新谷「嫌ですよそんなの、何で僕が行かなきゃならないんですか」

柳原「新谷、本当に身に覚えが無いのなら、何も恐れることは

無いだろう。警察に行ってしっかり調べて貰って来い」  
新谷「嫌ですよそんなの」

と後ずさる。

柳原「どうした。男らしくしろ、それともやっぱりお前が犯人なのか」

新谷「だから違いますってば」

柳原「なら行って身の潔白を証明して来るんだ。ホラ、どうした」

と新谷の腕をつかんで静加の方へ連れて来ようとする。  
る。

新谷「嫌だ！ 放して下さい、課長お願いです。もう嫌だと言ってやるじゃないですか」

連れて行くこうとする柳原と揉み合いになる。

新谷「嫌だ、嫌だっ……」

柳原「大人しくしろっ」

弾みで柳原のワイシャツの胸元をつかみ、引っ張る。  
バリッと柳原のワイシャツが破れ、胸にブラジャー  
を着けているのが露になる。

一瞬止まる一同。  
静まり返る。

「？」と思って周りの人々を見回す柳原。自分の胸  
元を見てギョツとなる。

柳原「イヤッ……」

両手で胸元を覆い隠してドアへ走り出そうとする。  
柳原の前に静加が立ちはだかる。

静加「待ちなさい！」

ハツとして方向を変え、反対側へ走ろうとする。  
牧崎と大沢が反対側の行く手を遮る。

柳原「……」

前後の行く手を阻まれ、両手で胸を隠し、真ん中に  
蹲る。

牧崎「……なんですか今のは？」

大沢「俺も見たぞ」

由里「先輩、私何か見ちゃったんですけど」

令子「うん……私も見た」

由里「何ですかアレは」

新谷「ぶっ……ぶっ……ぶっ」

牧崎「ブラジャーですっ！」

大沢「とんでもねえ野郎だ！ こいつが下着泥棒の犯人だろう」

令子「そんな……まさか、課長が……」

由里「下着泥棒の犯人だったの……へっ、変態っっ！」

美代は黙っているが、驚きのあまり目を見開き、じ  
っと柳原のことを見つめている。

素泉「なんてことだ、柳原君。まさか君が……」

柳原「いえ……あの……あの……私は……」

新谷「課長、よくも僕のこと犯人扱いしてくれましたね。課長  
のこと尊敬して、一生付いて行こうって思ってたのに……  
…この、この、変態課長っっ！」

由里「（ヘナヘナと）信じられない、そんなまさか、課長だったなんて……」

令子「ほ、本当にそうなんですか」

柳原「……」

令子「どういうことなんですか課長」

柳原「（動揺し）いや……私は……その」

新谷「何だって言うんですか」

柳原「……」

令子「そうなんですか課長、私には全く信じられません、課長の様な方がそんなことをなさるなんて」

由里「でも今確かに見ましたもん。課長はブラジャーしてましたっ」

令子「だけど、管理人さんの証言は？ 犯人は身長〇〇センチくらいで（体型）だって言ってたんでしょう」

由里「お爺ちゃんだから良く見えなかったんですよきつと」

令子「だけど、昨日の3時頃でしょう？ 課長は何処にいた？」

由里「昨日は千葉の農家に野菜の仕入先の視察に行ってたはずですけど」

令子「（柳原に）課長が3時頃いらした場所は何処ですか？」

柳原「……」

令子「課長、視察にいらした農家と言うのは何処なんですか、連絡先を教えてください」

柳原「……」

令子「課長」

大沢「ふん、コレで決まりだな」

柳原に近づく牧崎。

牧崎「柳原さん、その手をどけてみなさい」

柳原「……」

牧崎「いいから早くっ、どけてみなさいっ！」



と胸を隠している柳原の腕をつかむ。  
抗う柳原。無理やり手をどかせようとする牧崎。

大沢「こいつ、見せてみろっ」

と大沢も近づき、柳原の反対の腕を持って引っ張る。  
二人で柳原の腕を力ずくで両側に伸ばす。

柳原「うわああ〜」

両手を左右に伸ばされてしまう。  
ワイシャツの下にブラジャーが露になる。

令子「かっ……課長っ！」

由里「……キヤーツ！ 変態ーッ！」

その光景に目を見張る美代。

柳原の胸からバツとブラジャーを剥ぎ取る大沢。

柳原「うわーっ！」

離された両手で胸を覆い、背中を丸めて蹲ってしま  
う柳原。

(ここからの柳原は鬱状態に固まってしまい、それ  
までの精気は微塵もなくなる)。

大沢「コレが何よりの証拠じゃねえか」

大沢の手からブラを取り、静加に持って来る牧崎。

牧崎「婦警さん。コレを証拠品として提出します。この人を警  
察に連れて行って下さい。でも出来ればその、マスコミ

には内密に願いたいのですが」

真剣に言いつつも顔が笑ってしまう牧崎。

静加「（受け取り）分かりました」

素泉「ちよ、ちよっと待ちたまえ牧崎君。今から南西デパートの重役さんたちがみえるんだぞ。柳原君はプレゼンテーションをしなければならぬじゃないか」

牧崎「もうそんなこと言ってる場合ではないでしょう社長。柳原課長は下着泥棒なんですよ」

大沢「もうおしまいですなあ社長さん」

柳原の腕を取り、立ち上がらせる静加。

静加「それじゃ柳原さん。行きましょうか」

柳原「……」

静加に連れられて行く柳原。

素泉「そんな、そんな馬鹿な！　ちよっと、柳原君っ！」

ドアの前にダツと美代が走り出て、静加と柳原の前に立ちはだかる。

美代「あの、ちよっと、ちよっと待って下さいっ！」

静加止まる。

牧崎「何だね須賀君」

美代「あの……課長が、課長がブラジャーをしてたからって、下着泥棒だって決め付けるのは、どうかと思います」

牧崎「どう言うことだね？」

美代「だからあの、そのブラジャーは、本当に私たちの誰から盗んだ物なのかどうか、ちょっと見せて欲しいんです」  
牧崎「婦警さん。見せてやって貰えますか」  
静加「はい」

静加からブラジャーを受け取って見る美代。

静加「良く見て下さい」

美代「……コレは、私のじゃありません（令子に差出し）中条さんも見て下さい」

令子「（受け取り）……違う、私のもありません（と由里に渡す）」

由里「……私も違う（静加に戻す）」

牧崎「ホントですか」

由里「ホントですよ」

大沢「ふん、それがアンタ等の物じゃなかったとしても、何処

か他の所から盗んで来たのかもしれないじゃねえか。なあ婦警さん」

牧崎「とにかくもう良いじゃないですか。後は警察の方で調べて貰えば分かることなんですから」

美代「あの……課長は、そのブラジャーは、きっと御自分でお買いになったんじゃないかと思えます」

大沢「テメエで買ったって？」

美代「だって私、見たんです」

牧崎「何をだね」

美代「課長が、ブラジャーを買ってるところを」

牧崎「何ですって？」

大沢「そんなことある訳やねえじゃねえか」

令子「あの、失礼ですが光フーズさん。貴方は外部の人間ではありませんか、少し黙っていて頂けないでしょうか」

大沢「何だと？」

令子「この件はうちの社内で行った問題なのですから」

大沢「でもな姉ちゃん。これからはお宅とうちとは同じ身内になるかもしれないんだぜ」

令子「どう言うことですか」

大沢「業務提携の話があるんだよ、それで今日俺は来たんだ。ところがこの柳原さんと社長さんに突っぱねられちゃってね。でもこうなりや状況は変わるだろう」

令子「業務提携ですか？」

大沢「おう、お宅で今ヒット商品になってる柳原課長が開発した幸多弁当の製造販売を、共同プロジェクトで全国展開しようと話してんだよ」

素泉「違う、これは事実上の乗っ取りだ。この人は柳原君の幸多弁当を劣悪な商品にして、金儲けをしようとしてるんだよ」

大沢「アンタ等の会社は経営不振で危ない状況なんだろ。それをオレの会社が救ってやろうって言ってんじゃねえか」

この遣り取りの中、柳原は破れたワイシャツの胸をかき合せたまま、椅子の  
ひとつにうな垂れて座っている。

令子「ですが、それとコレとは話が別です。下着泥棒のことは、あくまでまだ我が社の中でのことなのですから。余計な口出しをするのはやめて下さいと申し上げているんです」

大沢「おうおう威勢のいい姉ちゃんだなあ」  
令子「婦警さん。実は今日は我が社にとつととても大切な商談があるんです。そしてそれにはどうしても柳原課長がいなければなりません。ですからもう少し、ここでお話をさせて頂く訳にはまいりませんでしょうか」

静加「構いませんよ、私はここでお待ちしています」  
令子「ありがとうございます」

美代の方へ向き直る令子。

令子「須賀さん。貴方が課長がブラジャーを買っているところを見たと言うのは本当ですか？」

美代「はい」

令子「それは何処で見たんですか？」

美代「渋谷のデパートの、ランジェリーショップです」

令子「それは一緒に行ったと言うことですか？」

美代「いえ……違います。私はその、見てたんです」

令子「そこで偶然見かけたと言うことですか？」

美代「いえ……」

令子「えっ？ どういうこと？（考え）もしかして課長の跡をつけてたの？」

美代「……」

牧崎「柳原君の跡をつけたって？ どうして君はそんなことをしたんですか」

美代「……」

大沢「そんなの作り話なんじゃねえのか」

令子「貴方は黙って下さい！」

大沢「おっおっおっかねえ……」

令子「須賀さん、実は私、前から薄々感じてたんですけど、貴方は課長のことを……」

美代「……」

牧崎「なんだね中条君」

令子「はい、須賀さんは……（美代に）良いわよね、言っちゃっても、この際だから」

美代「……」

令子「須賀さんは、前からずっと課長に好意を寄せていたのだと思います」

美代「……」

牧崎「柳原さんのことが好きだったって！？ それでストーカーよろしく跡をつけていたって言う訳ですか、そしたら柳原さんが女性の下着売り場に行っってブラジャーを買っ

ているところを見たと言うんですか」

美代「……」

牧崎「すると何ですか？ その時柳原さんが買っていたのはそのブラジャーだったんですか？」

美代「……いえ、その時課長が買っていらしたブラジャーは、それではありませんでした。でも、今課長が着けていらしたブラジャーは、きっと御自分でお買いになった物だと思っんです」

牧崎「どうしてそんなことが言えるんですか」

美代「課長は、下着泥棒なんて、する人じゃありません」

牧崎「それはあくまでも君の個人的な見解でしょう。最早この状況においては非情に可能性の低い希望的観測と言っても良い」

美代「そんなことはありません！」

牧崎「しかし考えてもみなさいよ、大の男がですよ、自分でする為にブラジャーを買っていたなんて……そんなこと」

大沢「（爆笑）あゝっはっはっは……」

令子「しかしその可能性が全くないとは言い切れないのではないのでしょうか。課長は本当にそのブラジャーを自分でお買いになったのかもしれないじゃありませんか、どうなのでしょう課長」

柳原「……」

虚ろな目を令子の方に向ける柳原。微かに頷く。

令子「やっぱり、そうなんですか？ 専務、課長はそのブラジャーを自分で買ったんです。自分で買ったブラジャーをしているのなら、問題はないではありませんか」

牧崎「それじゃ柳原さんはオカマだと言うことですか」

美代「違います」

大沢「じゃ何だ？ 変態かよ」

美代「課長はオカマでも変態でもありません」

牧崎「それならどうしてブラジャーなんか着けてるんですか」  
美代「それは……」  
令子「それは私にも分かりませんが、でもブラジャーを着けていたからと言って、下着泥棒の犯人だと決め付けてしまうことは出来ないではありませんか」  
新谷「でもどう考えたってブラジャーしてるなんておかしいよ」  
由里「それはさあ、だからうちよっとしてみたかったんじゃないの」  
新谷「男がそんなこと思うかよ」  
由里「そりやだから、少しは変態なのかもしれないけど」  
新谷「変態なら下着泥棒かもしれないだろ」  
美代「課長がそんなことをする筈がありません」  
新谷「なんだよ、僕の時は皆ですぐに犯人だって決め付けて、何を言っても信じてくれなかったクセに」  
由里「だって新谷は見るからにそう言うキャラだもん」  
新谷「なんだよキャラって」

由里「課長はそんなことする様な人には見えないもん」  
新谷「僕は見えるのかよ」  
由里「うん」  
新谷「……」  
大沢「おうおう皆さん方よお。どうかしてんじゃねえのか。どう考えたって大の男がワイシャツの下にブラジャー着けて歩いてるなんて、普通じゃねえに決まってるじゃねえか」  
牧崎「そうですよ、疑われてもしょうがないじゃありませんか」

柳原の側へ来て肩を揺さぶる令子。

令子「課長。何とか仰って下さい」  
柳原「(虚ろ)……」  
令子「課長」  
柳原「……」

大沢「な、何も答えられねえってことが何よりも事実を物語ってるじゃねえか」

素泉「柳原君！ 本当に君は下着を盗んだのかね？」

力無く素泉の方を見る柳原。

素泉「（勘違いし）そんな……何てことだ」

美代「違います！ 課長じゃありません」

大沢「なんでアンタたちはそうコイツのこと庇うんだよ」

令子「庇っている訳ではありません」

大沢「庇ってるじゃねえか」

新谷「僕の時是谁も庇ってくれなかったクセに」

静加「（静観している）」

美代「私、課長が一人でブラジャーを買っているのを見た時は、課長は独身でいらっしやるから、誰か恋人の人にプレゼントするのかなあと想着って、ショックだったんです。

けど、課長にはお付き合いしている女性がいるような様子は無かったし、どうしてだろうって、ずっと考えてたんです。けどコレで分かりました。でもまさか、御自分で着けていらしたなんて……」

牧崎「こんな娘みたいな女子社員にモテちゃって、貴方はなかなか幸せ者じゃないですか柳原さん。須賀君は柳原さんの何処がそんなに御気に召したと言うんです？」

美代「……課長は、どんなつまらないことでも、私が相談すると、いつも親身になって話を聞いてくれましたから」

牧崎「今までにその気持ちを柳原さんに伝えたことはなかったんですか」

美代「それは、なかなか言えなかったんです。でも、課長もきっと私の気持ちを……」

柳原を見る美代。

柳原は俯いたまま。



牧崎「今までにお二人の間のお付き合いはあったのですか？」  
美代「……何度か一緒にお食事とかはして下さいましたけど、

でもそれ以上のことは……」

牧崎「つまり男女の付き合いは無かったと言うことですね」

令子「専務！」

牧崎「いやこれは大事なところなんですよ」

令子「どうしてですか」

牧崎「いいから、須賀君。どうなんですか」

美代「課長はいつも私に優しくしてくれましたけど。でも私は単なる部下以上の存在にはなれないのになって、思っていました」

大沢「そりゃつまり、そいつがオカマだからってことだろう」

美代「違います」

牧崎「柳原さんは自分がオカマだと言うことを今までひた隠しにしていたのではありませんか、だからずっと独身なん

でしょう」

令子「オカマの何が悪いんですか」

美代「何とか言ってお下さい課長、こんな好き勝手なこと言われて良いんですか？」

柳原「……」

大沢「ふん。腑抜けが、返事も出来ねえのか」

柳原「……」

令子「課長は、決して人に知られてはならない秘密を知られてしまった為に、ショックを受けているのではないでしょうか」

素泉「柳原君、君は自分で着ける為に、自分でそのブラジャーを買ったのかね」

柳原「いえ……」

素泉「違うのかね？」

柳原「あ、いや……」

素泉「(苛つき)だからどっちなんだね！」

柳原「……これは……妻への、プレゼントだったんです」

牧崎「妻へのプレゼントですって？ 貴方は独身じゃなかったんですか」

柳原「……」

美代「違います、課長には、昔亡くされた奥さんがいらしたんです……」

素泉「……」

牧崎「昔いたんですか？ そうですか……でも亡くなったってことはもういないんじゃないんですか、もうこの世にはいない奥さんに、どうして下着を買ってあげる必要があるんです。また何故それを自分で着けてる必要があるんですか」

柳原「いえ、それは……」

美代「課長はきつと、亡くされた奥さんのことを今でも深く愛していらっしやるんです」

大沢「ふん、こんな変態でもか？」

美代「変態なんて言うのやめてください。ブラジャーをしてたって人に迷惑を掛けてる訳じゃ無いじゃないですか」

大沢「だが異常であることに違いはねえだろう」

牧崎「柳原さんは何か屈折しているんじゃないんですかね。昔自分の経営していた仕出屋を営業不振で倒産させたと言うじゃありませんか。奥さんを亡くされたと言うことですが、本当は逃げられたんじゃないんですかね、そしてそんな絶望的な挫折感から抜け出そうと苦しんでいるうちに、おかしい性癖を育んでしまったと言いうことではないんですかね」

美代「違います、課長が仕出屋を倒産させたって言う噂は嘘なんです。本当は厨房が火事になって、お店が焼けてしまったんです」

素泉「（見る）……」

牧崎「火事ですって？ 本当ですか」

美代「本当です。以前課長が話して下さいました」

柳原「……」

美代「その火事の時に、奥さんを亡くされたんです」

令子「そんな……」

牧崎「……社長はそのことをご存知だったんですか」

素泉「（顔を背ける）……」

大沢「なあ姉ちゃん。もうそんなことあって良いんじゃないかねえのか。いつまでもここで話してたってしょうがねえだろう。何にせよ調べれば分かることなんだから、課長さんの家でも搜索すれば大量の盗んだ下着が出てくるなりして犯人かどうか分かるだろう。だからよ、一度婦警さんに連れてって貰って、取り調べして貰ってよ、白か黒かハッキリして貰ったら良いじゃねえか、な」

牧崎「その通りですよ」

素泉「いや待ってくれ」

牧崎「もうこうなっては仕方ありませんよ社長」

大沢「あくもうウンザリなんだよ！（バーンとテーブルを叩き、

柳原に）おい、臍抜け！ズボンも脱いでしろ！まさか女物のパンティまで履いてるってんじゃないやねえだろうなあ」

と柳原に迫る。

令子「やめて下さいそんなこと」

と大沢の剣幕にたじろぎながらも健気に立ちほだかる。

美代と由里も一緒に来て立つ。

大沢「大の男がホモでもねえのに自分でブラジャー買って着けてるだって？んなことある訳やねえだろうが！」

牧崎「そうですよ」

令子「……」

大沢「あんまり笑わせんじやねえよアンタたち」

由里「……私他にもブラジャーをしているサラリーマンがいる  
と言うのを聞いたことがありますっ」

新谷「……そうだ。僕も聞いたことがある。ブラ男とかブラリ  
ーマンとか言っって、同性愛者でも女装趣味と言う訳でも  
ないけど、普通に女の人と結婚して子供がいて社会的な  
地位もある人が、実はワイシャツの下にブラジャーをし  
てるって」

由里「へんな理由からじゃなくて、締め付け感が良くて落ち着  
くとか、小さい頃お母さんの愛情が不足してて、母性を  
求める気持ちから自分でブラジャーする様になったとか、  
理由はそれぞれらしいけど……」

美代「私、課長がブラジャーをなさっていることを知って、分  
かるところがあります」

牧崎「分かるって？ 何がです」

美代「課長の優しさとか、暖かさとか」

由里「そう、私にも分かる。課長って、確かに何処かお母さん  
みたいなところある」

牧崎「お母さんみたいって、へんでしょう。お父さんみたいっ  
て言うなら分かりますけど、男なのにお母さんって」

美代「違います。女性とは違います。やっぱり男性なんだけど、  
その中に女性的な柔らかさがあるって言うか、上手く言  
えないけど、お母さんみたいな部分もあるけど、やっぱり  
りお父さんみたいに大きいって言うか」

令子「私にも思い当たることがあります。課長には仕事に対し  
て厳しい事を言われる時にも、何か愛情の様な物を感じ  
るんです。そう、言われてみれば確かに母親の温かみと  
でも言う様な」

牧崎「やっぱりオカマじゃないですか」

由里「だから違うんです。そゆんじゃないんです。男らしいん  
だけど、それでいて懐が深いと言うか……とにかく専務  
なんかとは全然違います」

牧崎「ふん！」

令子「ですから下着泥棒の犯人はきっと別にいるんです」

大沢「別にいるって何処にいるんだよ」

由里「そうなるをやっぱり怪しいのは……（と新谷を見る）」

新谷「冗談じゃないよ全く！」

由里「とか言って実はアンタもブラジャーしてたりして」

と新谷の胸を触ってみようとする。

新谷「してないよ、ほらっ！」

とワイシャツをたくし上げて見せる。

由里「ふん、それじゃ私たちのこと勝手に写してたあの写メ

はどう言うことだったの？」

新谷「アレは……」

由里「どう言うことよ、私たちのこと隠し撮りしてたんでしょ

う」

新谷「違うよ」

由里「どう違うってのよ」

新谷「確かに隠し撮りはしてたかもしれないけど」

由里「ホラみなさい」

新谷「でも違うんだよ」

由里「何がよ」

新谷「僕は……」

由里「僕は？ 何？」

新谷「……三人とも撮りたかった訳じゃないよ」

由里「えっ、どういうことよ」

新谷「……」

ハッとして由里はもう一度新谷の携帯を出して画面を見る。

スイッチを押して画像を切り替えながら見る。

美代「どう言うことなの？」

由里「（見てる……）あ、あ、あ、コレってもしかして」

新谷「……」

美代「えっ？」

由里から携帯を受け取って見る美代。

美代の耳に口を寄せてゴニョゴニョ話す由里。

美代「ええっ！（画面見て）ホントだ……」

令子「何よ」

美代「はい（と渡し）」

令子「（見る）」

携帯画面を切り替えながら見ていく令子。

牧崎「なんです、どう言うことですか」

由里「新谷が撮ってたのは私たち三人の写真じゃなくて、本当は撮りたかったのは、その中の一人だけ……」

新谷「あわわわわ……」

牧崎「一人だけって、どう言うことです」

携帯を手に茫然としている令子から携帯を取り、牧崎に見せる由里。

由里「見て下さい、いつも私たちが三人とも写ってる訳じゃないじゃないですか、でも一人だけは必ずどの写真にも写ってる……」

携帯の写真を送って見る牧崎。

牧崎「あ、本当だ」

令子「……」

由里「新谷、アンタ、前から……」

新谷「やめて下さいい」

由里「アンタ前から（令子を見る）……」

一同の視線が令子に集まる。

両手で顔を覆ってしゃがみ込んでしまう新谷。

大沢「おいおい小僧。こんな怖いお姉ちゃんと一緒にいたら大

変だぞ。あそっか、さては

お前、Mだな……」

令子「（取り乱し）やっ、やっ、ヤダもう、新谷君ったらバカ、

何やってるのよもう」

由里「ヤダ……中条さん。赤くなってる」

令子「そんなもう、何言ってるのよもうイヤアねえ……もう

……バカバカア……」

身をよじり、居た堪れなくなって両手で顔を覆って  
しまう。

大沢「がっはっはっは……何だよ、鬼ババアかと思ったら、ち

ったあしおらしいところもあんじゃねえか姉ちゃん、あ

っははは……」

令子「やかましいわよっ！」

新谷「あ、あの……中条さん。ぼ、僕……」

令子「……（ソッポを向いてしまう）」

由里「新谷ったらそうだったのお、ごめんねえお姉さんたちち

っとも気が付かなくてえ」

と新谷の頭を撫ぜる。

新谷「……僕、前からずっと、バリバリ仕事してる中条さんのことが素敵だなあと思ってた、でもきつと僕みたいな青二才は相手にして貰えないかなあと思ってた……それで、それで……ごめんなさい（泣く）」

由里「よしよし、ねえ、中条さんてば」

令子「知らないわよっ！」

新谷「……」

由里「だけど、下着泥棒が新谷でもないんだとしたら、一体誰なんだろう……」

大沢「だから課長さんだって」

由里「しつこいですねえオッサンも」

大沢「なんだとお！」

大沢に向けてイーッとする由里。

牧崎「まあちよつと、話を戻しましょう。社長」

素泉「（見る）」

牧崎「社長は柳原さんが倒産させた……いや火事で燃えてしまったと言う仕出屋の先代さんには、ずい分お世話になったと言う話を伺っています。そのよしみで柳原さんのことを優遇されて来たと言うのは分かるのですが」

素泉「……」

牧崎「ここはひとつ、あえて非情になられてでも、厳しい処分を下すことが必要なのではないのでしょうか？」

由里「なんで課長が処分されなきゃならないんですか、何も悪いことしてないのに」

牧崎「例え悪いことはしてなかったとしても、現にこれだけの騒ぎを起こしてるんだから」

由里「課長が起こそうと思ってる起こした訳じゃないと思いますけど」

大沢「起こした騒ぎは必ず誰かが責任を取らなきゃならねえつてのが社会のルールって物なんだよ、分かったか小娘っ



！」

由里「光フーズさん。さっきから中条さんが言ってたのを代わりに言わせて貰いますけど、これはまだ私達の会社の中での問題なんですから、外部の方は口出ししないで貰えませんか」

大沢「ふんっ！ 生意気ばかり抜かしやがって」

由里「もう中条さん。何とか言っして下さいよう」

令子はまだフニヤフニヤである。

由里「ダメだ……」

牧崎「社長。いずれにしてもこんな状況になってしまっっては、仕方がないじゃありませんか。このことがマスコミに嗅ぎ付けられでもすれば、これまで築いてきた地元の人たちからの信頼も失ってしまうことになるんですよ」

素泉「……」

牧崎「ですからここはひとつ、ことを穏便に済ませる為にも、柳原君には警察で取り調べを受けて貰うことにして、南西デパートさんには今回の件は無かったことにして、丁寧に断りをすると言うことで……」

素泉「柳原君、本当に君が犯人だと言うのなら、私も仕方が無いとは思う。でも……」

美代「違う、課長は犯人じゃありません」

大沢「（大声）だからそれを警察に調べて貰えって言ってるんだろっが！」

美代「（睨む）……」

牧崎「……婦警さん。この事態を打開して頂くことは出来ないでしょうか」

静加「これ以上こうしていても事態が進展する様子は無さそうですね。では柳原さんには署のほうへ来て頂いて、詳しいお話を伺うことにしましょうか」

牧崎「お願いします」

素 泉「待って下さい」

テーブルの電話機が内線の呼び出し音を発する。  
受話器を取る令子。

令 子「（平静を取り戻し）はい会議室です。はい、はい……そう、分かりました。応接室にお通ししておいて下さい。お茶をお出ししてね、はい、宜しく願います（切つて）社長、南西デパートの河橋様と常務の篠田様が見えになりました」

素 泉「……」

牧 崎「（素泉に）もうこうなっては仕方ありません。南西デパートさんにはお引取り願います。私が行って来ます」

部屋を出ようとドアへ向かう牧崎の前に立ちふさが

る新谷。

牧 崎「何だね」

新 谷「……僕は、課長が幸多弁当の商品化の為に今までどれだけ苦勞なさって来たのか、一番よく知っています。こんなことで南西デパートさんとの契約が破談になってしまふなんて、悲しいです。社長、お願いします。このプロジェクトを僕が引き継いでやらせて貰う訳にはいかないでしょうか」

令 子「新谷君。貴方の気持ちは分かるけど、課長が長年かかって開発して来た幸多弁当のプロジェクトを、代わりの方がプレゼン出来るとは思えないわ」

新 谷「中条さん……」

由 里「ましてや新谷じゃねえ」

新 谷「うるせえよ！」

牧 崎「中条君の言う通りです。ですから契約は取り止めにしま

しよう」

大沢「社長。心配すんなって、図らずもこう言う結果になったけどよ、後からこうなって良かったって、絶対言わせてやるからよ」

牧崎「それでは、良いですね社長」

素泉「……」

牧崎「先方は柳原さんに会う為に来ているんですよ。約束をしたのに、本人もここにいると言うのに、理由もなくいつまでも待たせておく訳にはいかないじゃないですか」

令子「婦警さん。柳原課長が犯人ではないことは調べて貰えばきつと分かると思います。ですから今日一日だけ、せめて終業時間になるまで、待って頂くことは出来ないでしょうか」

静加「それは逮捕状が出ている訳ではありませんので、この方が逃亡すると言う可能性が無ければ、こちらとしては構いませんが」

令子「それは絶対に大丈夫です。仕事が終わった後で連れて行って頂いて結構ですので。課長、後で警察に行くとしても、今日のプレゼンだけは、何としてもして下さい」

牧崎「そうか中条君。幸多弁当の南西デパートへの出品が決まれば、君が現場担当として派遣されることになっていましたからね。この企画が没になっては困ると言う君の気持ちも分かかりますが」

令子「違います。私はそんなこと言ってるんじゃないありません」  
牧崎「往生際が悪いですよ。もしそれで今日のところは乗り切れたとしても、後で柳原君が下着泥棒だと言うことが発覚すれば、格式高き南西デパートさんのことです。契約は破棄にされてしまうに決まっているじゃありませんか」  
令子「課長が犯人ではないことは調べれば分かることなんです」  
牧崎「下着泥棒ではなかったとしても、ブラジャーをしていたことは事実です」

令子「……」

大沢「いずれにしたってそのことが先方に知られば、契約は中止されてしまうだろう」

令子「ここにいる皆の秘密にしておけば良いじゃありませんか」

素泉「そうだ、それで良い、さあ柳原君、気を取り直して予定通りにプレゼンをするんだ」

新谷「そうですね。僕からもお願いします」

柳原「……」

大沢「おたくの社員たちが黙っていたとしても、それを知った外部の人間がいたとしたら、そこから噂が漏れるということも考えられると思うがね（ニヤリと笑う）」

令子「どう言うことですか」

大沢「ふん」

令子「貴方って人は……（睨む）」

大沢「何だよ、やっぱし怖えなあ姉ちゃん」

令子「何故いけないんですか。何故男性がブラジャーをしていてはいけないんですか」

大沢「世間はそうは思わないね」

令子「……」

由里「誰だって人から見ればヘンなクセとかあるじゃないですか。殆どの男性がブラジャーしてないからって、たまたましてる課長のことだけを変わった人間みたいに言うのはおかしいと思います」

牧崎「ヘンなクセなんて私にはありませんよ」

ツカツカと牧崎に歩み寄り、牧崎の手をつかむ由里。

牧崎「何だね」

由里「皆さん見て下さいこの指先を。なんで牧崎専務の爪はこんなにみんなワヤワヤなんでしょうか」

牧崎「え？」

由里「自分でかじって食べちゃったからじゃないんですか？」

牧崎「あっ、コレは（手を隠す）」

由里「爪を食べるなんて立派な変態じゃないんですか」

牧崎「(慌てて手を隠す)」

由里「ホラこっちも(と反対の手を取る)両方とも食べちゃってるでしょう。まさか足の爪まで食べてるんじゃないでしょうね」

牧崎「(思わず爪先を庇う)」

新谷「そくだそくだ。僕も知ってるぞ」

由里「でも誰も専務のことを変人だなんて思ってますん」

牧崎「……」

由里「新谷だって、いまだに時々パンに鼻クソを付けて食べてるんです」

新谷「ええっ!」

由里「いいのよ、別に人に食べさせてる訳じゃないんだから。

他の人から見たら気持ち悪いけど、自分では塩味がして美味しいんですよ」

新谷「……」

由里「他にもあります。以前私が付き合っていた彼氏はスポーツやってとんでもステキだったけど、ランニングシャツの裾を全部ブリーフの中に詰め込んでいました。でも彼にとってはそれが普通で、おかしいことでもなんでもなかったんです」

令子「そう言えば私も、女装クラブに通ってたことがバレちゃった伯父さんがいます。でも他人に迷惑をかけている訳じゃないからって、今じゃ奥さんもそれを認めています。他人から見ればどんなに変なことだと思われても、本人にとってはそれが必要なことだってあるんです」

美代「(手を上げて)はいっ、私の弟は子供の頃のクセが抜けなくて、ウンコする時は素っ裸になってします」

新谷「そんなことまで発表しなくても良いんじゃないの」

令子「誰でもあるのではないでしょうか、他人から見ればおかしなことだと思われても、そのことによって自分を保っていられると言う行動が」

牧崎「(苛付き)ですがねえ君。柳原さんがこの状態じゃ、プレゼンどころかまともに話をすることも出来ないじゃないですか。それにもし、ちゃんとプレゼンが出来て契約が成ったとしても、後で本当に犯人だったと言うことになっただらどうするんですか！」

令子「課長は犯人じゃありません」

大沢「でも変態であることに変わりはないだろう」

美代「変態じゃないって言ってるじゃありませんか！」

大沢「何でもいよいよ、アンタ等がどう理屈をこねたところで、コイツがブラジャーしてたことが露呈すれば契約が中止されることは確かだ」

いきなりドアが開いて河橋好彦(27)が踏み込んで来る。

スラリとした体型にセンスの良いスーツを着こなし、育ちの良さと気品が滲み出ており、その態度は自信

に満ちている。

好彦「失礼します」

素泉「河橋さん！」

ハツとして三人の女子社員と新谷が柳原を隠す様に慌てて並んで壁を作り、好彦から柳原が見えない様にする。

好彦「一体いつまで待たせるんですか、うちの常務を連れて来ているんですよ。どう言うつもりなんですか。あなた方はうちの契約を破談にするおつもりなんですか」

素泉「いえ、決してそんなことは、すみません。もう少し、待って下さい」

好彦「(静加を見て)何かあったんですか」

静加「はあ……」

好彦「(皆に) 一体どうしたって言うんですか」

人の壁を作って整列している三人の女子と新谷を怪訝に思う好彦。

脇から見ようとしますが、その度に4人は動いて好彦から柳原が見えない様に隠す。

好彦「何なんです、何があるんですか」

遂にバツと四人の間を突いて割って入る。もしくはフェイントをかけて脇から見る。

好彦の前に破れたワイシャツをかき合わせてうな垂れている柳原の姿が露になる。

好彦「柳原さん……それは、どうしたって言うんですか」

大沢「ふっ、ふははははははは……あゝっはっはっはっはっは

っは……これで終わりだな」

素泉「いや、コレはその、何でもないんです」

好彦「何でもないってことはないでしょう」

牧崎「それがその、全くお恥ずかしい話でして、実は柳原君が、ワイシャツの下にこんな物を着けていたということが判明いたしました」

素泉「コラッ、牧崎君、よしなさい」

静加からブラジャーを受け取って広げて見せる牧崎。

好彦「何ですかそれは」

牧崎「見ての通り、ブラジャーです」

好彦「それを？ 柳原さんが着けていたと言うんですか」

牧崎「そうなんです、驚くべきことに」

衝撃を受けて、呆然と柳原を見つめる好彦。

牧崎「さらに課長には我が社の女子寮から下着を盗んでいたのではないかと言う疑いが掛かっておりまして、この婦警さんにこれから警察へ連行されて行くところなんです  
(静 加にブラジャーを返す)」

令子「連行ではありません。任意の取調べを受けに行くだけなんです。聞いて下さい南西デパートさん。柳原課長は絶対に下着泥棒なんてする人ではありません。濡れ衣なんです。調べれば分かることなんです」

好彦「柳原さん。貴方は下着泥棒をしたんですか」

柳原「……」

好彦「一体どうしたって言うんですか！」

柳原「……」

牧崎「え、それです。河橋さん。こんな様な状況ですのでその、誠に申し訳ないのですが、今回の幸多弁当を南西デパートさんのお弁当フェアで販売すると言うお話は、

無 かったことにして頂いて……」

好彦「何を言ってるんですか、冗談じゃありませんよ、柳原さん。今まで一緒に打ち合わせを重ねて来たじゃありませんか、今までの苦勞を無駄にしまっても良いんですか」

柳原「……」

牧崎「しかしですねえ河橋さん」

好彦「(柳原に) 今まで僕は、会長の孫だと言うことで、祖父の七光りで社長に就任すると社員たちから擲揄されて、何とか自分の実績を作りたいと必死に頑張ってきたんです。祭事での幸多弁当の限定販売は、他のデパートに先駆けてウチが独占的にリード出来る企画で、僕にとっても社員たちの信頼を勝ち取るチャンスなんですよ」

牧崎「……」

好彦「ねえ柳原さん。ホントに貴方下着泥棒なんてしたんですか？ 何かの間違いじゃないんですか？」



柳原「……」

好彦「何とか言ってお下さいよ」

大沢「ふっ、見ての通り、コイツはただの変態ですぜ」

好彦「そんな……一体何やってんですか柳原さん！ こんなことの良いんですか？ ただの変態に成り下がってしまったって、貴方は終わりなんですか？」

ドアが開き、篠田晃（52）が入って来る。やはり仕立ての良い高級スーツを着ており、重役らしい貴禄がある。

篠田「どうしました好彦さん。今日は中止ですか？」

好彦「いえ、それが……」

篠田「（柳原を見て）なんですか、わざわざこちらから出かけて来ていると言うのに、柳原さん。その態度はないんじゃないですか」

篠田の前に立って頭を下げる素泉。

素泉「いや本当に、今日は不測の事態でありまして、いや本当に申し訳ありません」

篠田「どう言うことなんです」

側から令子がそっと来て篠田に声を掛け、小声でボソボソと説明する。令子の説明に耳を向ける篠田。  
立ち尽くして柳原を見ている好彦。  
令子の説明を聞き、好彦の側へ来る篠田。

篠田「好彦さん、やはり生前の会長の意思を尊重しましょう。

会長は素泉食品の製品は絶対に我が社では取り扱ってはならないと仰ってたじゃありませんか」

素泉「……」

篠田「まあそれだけでなく、今回の件は白紙撤回と言うことで仕方がないと思われませんが」

好彦「……」

篠田「良いですね、折角ですが今回の好彦さんが持ち込んで来られた企画は、中止と言うことにしましょう」

大沢「今回は折角お坊ちゃんが只のバカ息子ではないところを見せるチャンスだったのに、残念でしたなあ」

好彦「何だっ!」

篠田「(大沢に)失礼じゃないですか貴方は、ここの社員の方ですか」

令子「違います、この人は部外者なんです」

大沢「申し送れました。私や光フーズの代表取締役でして、大沢と申します」

近くへ来て篠田に名刺を渡す大沢。

大沢「実はこの度私どもと素泉食品さんとで業務提携のお話をさせて頂いてるんですがね、思いがけずこんな事態に陥っております、うちとしてもホトホト戸惑っておりますよ」

篠田「……」

大沢「しかし南西デパートさんも大変ですなあ、創業者が一代で作り上げた企業を二代目が継いだ途端に経営不振に陥って倒産してしまったなんて言う話は、列举に暇が御座いませんものなあ」

好彦「(睨む)」

篠田「ふっ、貴方ねえ、そんなに露骨に本当のことを言うもんじゃありませんよ」

好彦「(篠田を睨む)」

好彦のことを侮辱されたと言うのにそれ程怒らず、半笑いの表情を見せる篠田。

好彦「篠田常務。貴方まで僕をバカにするんですか」

篠田「いいえ、決してその様な」

大沢「察するに会長がお亡くなりになって、貴方方重役としては、長く続いた社長のワンマン経営に終止符を打ちたいと言うところですか。幾ら親族だからと言って、無能な人間に采配を振るわれたんじゃ社員たちは溜まったものではありませんからなあ」

篠田「いやーそんな痛いところを突かれたのでは返す言葉もございせんがね、あっはっはっは……」

と何故か意気投合してしまう二人。

居た堪れない好彦。

大沢「お気持ちお察しますよ」

好彦「なんだとっ」

大沢に殴りかかろうとする好彦を止める篠田。

篠田「ちょっとちょっと、お坊ちゃま、おやめ下さいよ、だから貴方はお若過ぎると申し上げているんです」

好彦「お坊ちゃまって言うのやめろって言うてるだろう」

大沢「あーっはっはっは……」

好彦「（篠田を振り払い）柳原さん。あんなに情熱を持って僕に語ってくれたじゃありませんか、この弁当は亡くなられた奥さんと一緒に、夢に向かって一生懸命作り上げた物なんだって、僕は感動しましたよ、小さな会社でもこんなに一生懸命に自分の仕事に打ち込んでる人がいるんだって、幸多弁当のことを語る時、貴方あんなに生き生きしてたじゃないですか！それが一体どうしたって言うんですか」

素泉「河橋さん。今彼はショック状態に陥っておりますて、ま

ともに話すことも出来なくなっておりますが、私は彼が下着泥棒なんかする人間じゃないと言っていることを確信しております」

好彦「僕はうちで出せる新しい企画商品を探して方々をマーケティングしている時に、こちらで評判になっていてる幸多弁当に出会いました。それとなく買って食べてみましたけど、すぐこれは全国展開して行けると思いました」

素泉「ありがとうございます」

好彦「それでその製造元を調べてコンタクトを取った時に、その弁当を企画開発したのが柳原さんだと言っていることを知った時には、ビックリしました……」

素泉「はい……」

篠田「好彦さん。もう良いでしょう。こうなってしまっただけは仕方がないではありませんか」

好彦「……」

篠田「貴方がただのボンボンだと言う社内での悪評を払拭しよ

うと思っただけで必死なのは分かります。ですが今回の件は先方の担当者さんがこんな有様じゃもう無理でしょう。やはり先代会長の意志を無視する様なことは、やめた方が懸命だったと言いうことではありませんか」

好彦「（無視し）柳原さん。貴方言っただけじゃないですか、この幸多弁当を日本中の人に食べて貰うんだって、それで亡くされた奥さんの夢も叶えてあげるんだって」

篠田「帰りましょう。これ以上ここにいる時間も無駄です」

好彦「篠田さん。貴方は何故祖父があんなにも頑なに素泉食品さんとの取引をご法度に行っていたのか、知っていますか？」

篠田「さあ、そこまでは私も聞かされてはおりませんでしたが、好彦「柳原さん。貴方がかつて奥さんと一緒に経営していた仕出屋は、26年前に倒産したのではなくて、火事で燃えてしまったんでしょう？」

素泉「えっ？ 貴方はそれを？」

好彦「その時貴方の奥さんは亡くなってしまったんでしよう。両親の反対を押し切って結婚した。大事な奥さんだったんでしよう」

柳原「（見る）……」

好彦「僕は知っていますよ。工場が燃えてしまって、銀行の融資も打ち切られて、その時背負ってしまった巨額の負債を肩代わりしたのは、僕の祖父なんではよう？」

篠田「何ですって？ 本当なんですかそれは」

好彦「柳原さん。もうこうなったら話して下さいよ、何があったのか、僕にももう話してくれたって良いじゃありませんか」

篠田「一体何の話をしているんですか」

好彦「その時亡くなられた貴方の奥さんは、うちの祖父の娘、つまり僕の母親なんではよう」

柳原「！……」

素泉「河橋さん、貴方はどうしてそれを」

好彦「僕は祖父から、僕の両親は僕が生まれて間もなく事故で死んだって聞かされてましたけど、高校生の時に、区役所へ行って戸籍を調べたんです。確かに母は亡くなっていましたけど、それは僕の生まれた年じゃなくて、僕が1歳の時でした。それに戸籍にはその時父親も死んだと言った記載は無かった。おかしいと思って調べたんです。まず母さんの経歴からお付き合いのあった人達を捜し出して、ある人から父さんのことを聞きました。弁当の仕出屋をやっていたけど不注意から火事を出してしまって、食品加工場は全焼。父さんは生まれたばかりの子供と多額の負債を抱えて暫くは頑張っていたけれど、遂にどうにもならなくなって妻の父親、つまり僕の祖父に負債の肩代わりをして貰う代わりに、息子を取り上げられてしまったんでしよう」

一同「！」

好彦「母と貴方とは、祖父の反対を押し切った駆け落ち同然の

結婚だったから、母は祖父から絶縁されていたんでしょ  
う」

柳原「……」

好彦「素泉食品との取引を祖父が禁止していたのは、ここに貴  
方がいたからですよ」

素泉「……」

篠田「そんな、そんなことが……」

牧崎「社長はそのことをご存知だったのですか」

素泉「……」

好彦「幸多弁当のことで貴方と打ち合わせを続けて来ましたけ  
ど、貴方は最初から僕が自分の息子だと言うことを分か  
ってたんでしょう？ 打ち合わせをやっていて時々目が合  
った時の感覚で、僕には分かりましたよ」

柳原「（見る）……」

好彦「……僕は会いたかったよ。父さんが生きてると言うこと  
が分かった時からずっと。貴方の所在を調べて、こっそ

り遠くから眺めていたこともありました。でも、自分か  
ら名乗り出るのは恐かった。だって、貴方だって知って  
たんでしょう。息子が祖父の元で育てられていると言う  
ことは、百も承知だったんでしょ。どうして一度も会  
いに来てくれなかったんですか」

柳原「……それは、多恵子の両親との約束を、守らなきゃなら  
ないと思ったから……それが、負債を肩代わりして貰う  
条件だったんだよ……俺にはああするより他に、しよ  
うがなかったんだよ……」

好彦「僕は絶対に許せないと思った。貴方は逃げたんだ。僕を  
捨てて、そんなお父さんのことを僕に教えるくらいなら、  
死んだことにしておいた方が良いと思って僕に隠してお  
いてくれた祖父の判断は正しかったと思う」

柳原「……」

好彦「僕は、一時は貴方に復讐することだって考えてたんです  
よ」

柳原「……」

好彦「でもやっぱり僕は、貴方に会いたかった。だって、生まれてから一度も親と言う物に会ったことが無かったんだから」

柳原「……」

好彦「それが思いがけず、貴方と一緒に仕事をする様になって、どうなるかと思ったけど、でも僕の顔を見ても、何も語るうともしてくれない貴方を見て、ますます憎しみが募って来たよ。だから、最初は協力する振りをしながら、行く行くは貴方の事業も会社も全てぶっ潰してやろうなんてことも考えてたんだ」

柳原「すまなかった。好彦、俺には、何を言う言葉も無い……」

好彦に向かって深く首をうな垂れてしまう柳原。

好彦「貴方が憎くて堪らなかったのに、それが今になってそんな腑抜けみたいになってしまったんじゃ、僕だって張り合いが無くなってしまっただけじゃないですか」

柳原「……」

好彦「……一体なんなんですか、ワイシャツの下にブラジャーしてたって？ 人の性癖なんか興味ないけど、あんまり情けないじゃないですか。変態オヤジですか、それが皆にバレたとたんに腑抜けみたいになっちゃって、貴方はもう抜け殻なんですか」

柳原「……」

好彦「……アンタなんてもう、どうにでもなれば良いんだ！」

しんと静まる一同。

牧崎「……え、それでは、どうでしょう河橋さん。南西デパートさんには、もうこの件からは手を引いて頂くとどうですか」

好彦「……」

篠田「分かりました。我々は今回の件からは、キツパリと手を引きます。すっかり無かったことにして頂いて結構です」

牧崎「分かりました」

素泉「いや、待って下さい。それではあまりにも……」

篠田「さ好彦さん。行きましょう」

好彦「……」

篠田に手を引かれて出て行こうとする好彦。

篠田立ち止まり。

篠田「（好彦に）それから、これだけはハッキリ言っておきますが、今度の取締役会で、貴方が次期社長に推薦されることは無いと思って下さい。長年続いた親族経営には、重役一同嫌気が差しているんです。貴方にはお辛いことかもしれませんが、南西デパートは新しい局面を迎えて

います。本当に我が社のことを思うなら、好彦さん、潔く身を引くと言うことも正しい身の振り方だと思います」

好彦「……」

牧崎「社長。我々にはそのレシピと販売権さえあれば良い訳です。すから。光フーズさんと業務提携をすること、限定販売ではなく全国販売へ向けた大量生産に入ります。それで宜しいですね。もう我々には、柳原さんは必要ありません」

好彦「そんな、大量生産だなんて、柳原課長が考えていたのはあくまで品質を落とさない数量での限定販売だったじゃないですか」

牧崎「もう貴方には関係ないでしょう。部外者の方が余計な口を挟むのはやめて貰えませんか、さあお引き取りください」

篠田「行きましょう好彦さん」



と連れ出そうとする。

好彦「ちょっと待って下さい。そんなことは許されない筈だ、だって幸多弁当は柳原課長が開発した商品でしょう」

牧崎「販売権は柳原課長個人ではなく、我々の会社にあります」

好彦「そんな」

素泉「牧崎君」

牧崎「柳原さんには辞めて貰えば関係ありません。今幸多弁当のブランドで売れば少々品質が落ちたからってバカ売れすることは間違いありません。どうせひと時のブームなんですから、売れるうちに売るだけ売ってしましましょう。こんなビジネスチャンスを逃す手はありません」

素泉「……」

牧崎「こうするより他に我が社が生き残る方法は無いですよ」

素泉「我が社ではなくて、君がじゃないのか」

牧崎「……」

大沢「よーしい、じゃあ話は決まったな。レシピと商品化の権利さえあれば、後はこっちで何とかするからよ。我々で新しくプロジェクトを立ち上げて行こうじゃねえか。なあ 篠田さんだって、これでやっとバカな二代目を無き者にすることが出来てシャンシャン シャンってもんじやねえか」

篠田「ふっ、まあこちらとしてももうこの件に異存はありません。後は貴方方でご自由におやり下さい、我々は帰ります」

篠田に手を引かれつつも尚柳原の方へ顔を向ける好彦。

好彦「柳原さん！ 幸多弁当の趣旨は品質を守った限定販売で、お客様との信頼関係を守ることじゃ無かったんですか、

篠田「本当にこんなことで良いんですか、ねえ、お父さん……」  
「には関係ありません。さあ行きましょう」

振り返りつつも篠田に引かれるままドアを出て行く  
好彦。

牧崎「それじゃ婦警さん。後は柳原さんのことをよろしくお願  
いします。もし犯人だとしても、どうか穏便にご配慮願  
います。それから、出来ればマスコミへのこの件のリ  
クも自制して頂けるとありがたいのですが」

静加「はい、それは重々に考慮して、慎重に対処しますので。  
それでは柳原さん。行きましょうか」

と柳原の腕を取り、立たせて出口へ向かわせようと  
する。

牧崎「柳原さん、ではそれでいいですね、返事が無いと言うこ  
とは、この件に了承したと見なしていいですね。貴方の  
幸多弁当のレシピと販売権は確かに譲り受けましたよ」

素泉「柳原君！ そんなことで君は良いのか」

柳原「（腑抜け）……」

素泉「柳原君！」

令子「課長！」

美代「課長……」

由里「課長っ！」

新谷「課長！」

柳原は黙ったまま静加に連れられて出て行こうとす  
る。

二人がドアを出て行こうとした時、外から好彦が駆  
け込んで来る。荒い息をしている。

静加止まる。一堂好彦を見る。

大沢「何だよ坊や、何か忘れ物か？」

好彦を追って篠田も戻って来る。

篠田「好彦さん」

好彦「ハア……ハア……皆さん。聞いて下さい。僕にはまだ、どうしても腑に落ちないことがあるんです」

牧崎「腑に落ちないってどう言うことですか」

大沢「今度は何だかって言うんだよ」

好彦「お願いします。もうひとつだけ、柳原課長に確かめておきたいことがあるんです。それは、僕は前からおかしいと思っていたことがあるんです。僕は子供の頃からずっと覚えてるんです。26年前に父の食品工場が火事にあって母が亡くなった時、僕はまだ1歳にも満たなかつ

た筈なんです。なのに、僕には母の胸に抱かれて眠った記憶があるんですよ」

篠田「……それがどうしたって言うんですか」

好彦「人によっては0歳の時の記憶が残っている人もいます。言うけど、それにしちゃ僕のは鮮明なんです。そう、2歳か3歳の時の記憶だと思えないんです。でも、その時には既に母は亡くなっていた筈なのに。僕に記憶があるのはどうしてなんだろうって、ずっと思っていたんです。そしたら今日柳原さんがブラジャーをしていたと言ったことを聞いて、何かずっと引っかかっているものがあった。今初めてその疑問が解けたんです。ねえ、お父さん。僕の思い出の中で抱かれていたのは母さんの胸じゃなくて、お父さんの胸だったんじゃないのかい？」

大沢「ふっ、ふはははは……はーっはっはっはっは……」

柳原「……」

好彦「ねえ、そうなんじゃないのかいお父さん」

柳原「うっ……うっ……うっ……」

柳原の身体がブルブルと震えだし、顔を歪めて嗚咽を漏らす。

好彦「父さん……」

柳原「私は……ブラジャーをしていないと、まるで真冬の夜に、裸でいるみたいだ……」

好彦「……」

柳原「お前が、泣いて、ママ、ママってあんまり泣くもんだから、俺があやしてもちっとも泣き止まないし、もうどうしようかと思って、ある日思いついて、試しに多恵子のしていたブラジャーを着けて抱いてみたんだ。そしたら、お前は泣き止んだんだ。安らかに眠る様になって。それから、ずっと、まだ赤ん坊だったお前という時は、多恵子のブラジャーを着けて、抱いてあげる様にしたんだ

……そうしていたら、まるで多恵子が、俺と一緒に好彦をあやして、育ててくれてる様な気がしてさ、多恵子が……多恵子が、俺の中に、一緒にいる様な気がしてさ……」

好彦「僕はね父さん。今回一緒に仕事をすることになって、父さんがバリバリ仕事している姿が見れて、とても嬉しかったんだよ」

柳原「……俺もだ。まさかこんな形で、お前を見ることが出来るなんて思ってもみなかったからな……お前が、一人前になって頑張っている姿を見れて、本当に嬉しかったよ」

好彦「なんで自分が父親だと言ってくれなかったんだよ」

柳原「もう二度と会わないと多恵子の両親と約束したから、でもまさかお前が俺のことを父親だと分かっていたいながら接触して来たとは思ってもいなかった。だから俺が父親だと名乗らない限り、許されると思った」

好彦「そうだったのか……」

柳原「済まなかった……好彦」

好彦「でも父さん、このままじゃ今まで頑張ってきた全てが無駄になってしまうじゃないかよ、それでも良いのかよ」

柳原「……」

静加の持っている携帯電話の着信音が鳴る。

手に取りスイッチを押す。

静加「はい滝です……はい……はい……はい了解しました（電話を切り、皆を見て）今連絡が入りました。こちらの女子寮の管理人さんが、下着泥棒の容疑者として逮捕されたと言うことです」

由里「ええーっ！」

令子「そんな、あの管理人のお爺さんが？」

美代「あの物静かなお爺さんが？」

由里「エロ爺さんだったの!？」

美代「イヤダ……」

静加「うちの署員が訪ねて質問していたところ、不審な点があった為室内を点検してみると、押入れの中から多量の女性用下着が出て来たので、緊急逮捕したと言うことです」

牧崎「そんな……」

由里「やったー！」

新谷「バンザイだー！ やっぱり課長は下着泥棒なんかじゃなかったんだよー」

静加「柳原さん」

柳原「（見る）」

静加「これでもう、貴方が私と一緒に署まで行く必要は、無くなったと思われませんが」

好彦「父さん。もう一度気を取り直して、一緒に頑張っていこうよ。なあ、僕と一緒に幸多弁当を南西デパートの祭事会場で、全国で販売して、お母さんの思いを日本中の皆に届けるんだろう。こいつらに品質を落とした大量生産

なんかさせちやダメだよ」

柳原「……」

好彦「ブラジャーしてたことがバレたって、そんなの良いじゃないか、ブラジャーしてたって父さんが父さんであることに代わりは無いんだから」

柳原「……」

牧崎「河橋さん。柳原さんが下着泥棒ではないことが証明されたからって、本人がこんな状態でもプロジェクトを遂行して行くことは出来ないと思われませんが」

美代「あの、婦警さん」

静加「はい？」

美代「課長が下着泥棒ではなかったことは、これで証明された訳ですから、ブラジャーは、返して貰っても良いですよ  
ね」

静加「あっ、ええ勿論です」

と美代に渡す。

ブラジャーを柳原に差し出す美代。

美代「課長、ブラジャーを着けて下さい」

柳原「えっ……」

由里「そうだよ、それを着けているのが本当の課長なんだとしたら、着けて元の課長に戻して下さい」

柳原「……えっ、だって、そんなの、おかしいだろ、男のクセに、ブラジャーしてるなんて」

令子「おかしくないですよ、どうか元通りの課長になって下さい。それを着けてプレゼンして下さい。私たちの為にも、さあ、南西デパートさんとの商談をやり直しましょう。」

課長が作った幸多弁当じゃないですか」

柳原「……」

美代「ブラジャーをしているのが課長なんです。人から見れば変わったところがあったって、他の人たちだって皆それ

それあるんですよ、それが課長の場合はブラジャーだっただけなんです。いいじゃないですか、私はそんな優しい課長が大好きです！」

柳原「……でも、きつと変人扱いされてしまうし」

好彦「いいんだよ、それが父さんなんだから」

新谷「課長にとっては、生きて行くのにそれが必要なんでしょう？ 恥ずかしかること無いじゃないですか、今までは人に言えない秘密だったかもしれないけど、今はみんな分かっています。そりゃ最初はヘンだと思ったけど、人ってそんな完璧じゃないですよ」

柳原「新谷……さっきはすまなかった。お前が犯人だなんて、疑ったりして」

新谷「いいんですよもうそんなことは」

柳原「自分はブラジャーなんか着けてたクセに……こんな俺のことを、許してくれるのか」

新谷「ブラジャー着けて元の課長に戻ってくれた方が、僕はす

っと嬉しいです」

柳原「世の中の人は認めてくれないだろう」

新谷「そんなことないですよ」

由里「そうだよ」

令子「私たちには分かっています」

由里「さあ、課長、来て下さい」

と手を引いて舞台中央へ連れて行く。

柳原「いいのかな？ 私は、ブラジャーをしてもいいのかな？」

令子「もちろんですよ、さあ、来て下さい」

由里「さあさあ」

と新谷と令子と由里に引かれて行き、舞台中央奥に立つ柳原。

好彦「ホラ、ワイシャツを脱いで！ 両手を前に出すんだ！」

意を決した様にワイシャツを脱ぎ捨て、上半身裸になると、両手を前に突き出す柳原。

照明が変わり、柳原にスポットが当たる。

ズーンと言う様な音楽が鳴り響く。

柳原の前方に立ち、ブラジャーの両端を広げて持つ好彦と美代。

美代「さあ、行きますよ課長！」

何かが迫って来る様な音楽と共にブラジャーを広げ柳原に向かって近づいて行く好彦と美代。

近づくに連れて音楽盛り上がり、ガッシャーんと言うロボットの合体音の様なSEと同時にブラジャーが装着される。

好彦と美代は両脇に離れる。

ブラジャーを装着した瞬間。噛み締める様に目を閉じる柳原。

固唾を呑む一同。

ゆっくりと目を開いた柳原は、ニカッと笑ったかと思うと弾ける。

柳原「さあさあ皆さん見て下さい！ これこそは私が妻の多恵子と一緒に丹精込めて作り上げたその名の通り幸多きお弁当。一度食べたらやめられない、安くて栄養満点でその上美味しいことこの上なし！ しかも日替わりメニューで毎日食べても飽きません。レシピはなんと60種類！ 一日限定150食のみです。これからは南西デパートさんと協力して全国の皆様にお届けすることが出来る運びとなりました。私等一同誠心誠意頑張って作らせて頂きたいと思っておりますので、どうか宜しくお願い申



し上げます！」

牧崎「ちよつちよつと待ちなさい柳原さん。もうそれは中止になつたんですよ、南西デパートさんとの企画は破棄にして、光フーズさんとで大量生産して全国展開して行くと言ふことに……」

柳原「うるせいやい！ 俺と多恵子が作った幸多弁当は金儲けの道具じゃないぞ！ そんなに儲かることが大切なのか！ そんな豪勢な暮らしなんか出来なくなつて、皆に喜ばれて、自分も慎ましやかに暮らして行ければそれで充分じゃないか！ 人の恨みを買つてまで何故そんなに利益を上げることが大切なんだ！ 俺と多恵子の作ったこの弁当はなあ、そんな金儲けをしようと思つて作ったんじゃないやい！ 人の役に立つて始めて自分も暮らして行くことが出来るんじゃないか！ 慎ましやかな経営の何処が悪い！ 儲けることばかり考へてるから日本の経済は良くならねえんだ！ 商売つてなあなあ、皆に喜

んで貰つて、皆の役に立つて、それで初めて自分も生活して行くことが出来るんだ！ コレは俺たちが生活させて頂く為の大事な仕事なんだ。俺の人生だ。お前等なんかに取られてたまるもんかーっ！」

牧崎「しっ……しかし、しかし……」

柳原のあまりの剣幕にタジタジになる牧崎。

大沢「しかしなあアンタ、ねえ篠田さん。やつぱり取引先の責任者が実はブラジャーを着けていたなんてえのは、やつぱり問題なんじゃないんですかねえ」

篠田「そりやそうですよ、世間に知られれば変態扱いされかねませんから」

美代「そんなことはありません。今じゃ世間でも男性でブラジャーして居る人が増えてるつて言うじゃないですか。男の人がブラジャーをして居るからつて、へんな人ばかりじゃな

「……いいってことも、課長を見ればきっと分かって貰えると思います」

令子「私もそう思います」

篠田「しかし……（助けを求める様に）それじゃ婦警さん。婦警さんはどう思われますか、やっぱり大の男がブラジャーをしているなんて言うのは、公共上の問題があるんじゃないんですか」

静加「……ワイシャツの下に何を着ているのかと言うことは、外からは見えません。従ってそのことに公共性は無いと言えます。ワイシャツの下に着ている物までを問題にするのは、明らかにプライバシーの侵害です。従って一概に男性がブラジャーをしているからと言って、それだけで異常な人間だと決め付けることは出来ないと思います。ワイシャツの下に何を着けているかは、個人の自由であり、その自由を侵害することは、誰にも出来ません」

思い切り拍手する令子・由里・美代・新谷。好彦。

「ウンウン」と頷く素泉。

好彦「それじゃ、良いですね！ 柳原課長の幸多弁当は、予定通り南西デパートが全国展開するお弁当フェアの目玉商品として、その品質そのままに限定販売させて頂くと言うことで、篠田さんも異存はありませんね」

篠田「……」

素泉「河橋さん。よくぞ言ってくれました。貴方にはどんなに感謝しても感謝し足りないくらいです。どうか柳原君と、彼の幸多弁当を、宜しくお願いしますよ」

好彦「はいっ、こちらこそ、一生懸命頑張りますので。宜しくお願ひします」

素泉「牧崎君、私は社長として改めて光フーズさんとの提携の話は却下することにするよ。異存は無いだらうね」

牧崎「うっ……はっ、はあ……」

大沢「ふんっ……」

令子「良かった……」

由里「（泣いて）ホントに良かったですよ〜ねえ（美代に）良かったよねえ」

美代「うん……」

新谷「（泣いて）僕もう、何がなんだか分からないや……な、中条さん、中条さんっ……」

と泣きながら令子に抱きつこうとするが、サッと交わされて頭から床に突っ込む。

好彦「父さん。実は僕、その、もうひとつ聞いておきたいこと

があるんだけど」

柳原「（ニコニコして）何だ」

好彦「僕、小さい頃母さんの胸に抱かれて眠った思い出の中で、いや、それが実はブラジャーをした父さんの胸だったっ

てことは分かったんだけど、その思い出の中で、ブラジャーだけじゃなくてオッパイを吸ったことも覚えてるんだ。チューチューって、でも、幾ら吸っても吸っても、全然オッパイが出てこなかったんだ……ま、まさかとは思うけど、その、それってさ、もしかして……」

柳原「うん……そうだ、それはこの……コレだ」

とブラジャーをずらし、自分の乳房を両手で包んで好彦に突き出す。

柳原「確かめてみるか」

好彦「うっ……うっ……うっ、うわああー!!」

頭を掻きながら悶絶する好彦。

大沢「ぶっ！ ぶわっははははは……」

牧崎「ああ〜っはっはっは……」

篠田「はっははははははは……ああはははは……」

思わず爆笑してしまう大沢と牧崎と篠田。

大沢「ひいっ、ひいっ、苦しいっ……こりゃ俺たちの負けだな

あ、なあおい……ああ〜っはははははははは……」

顔を見合わせ、肩を叩きあって抱腹絶倒する三人。

他の皆も笑う。

全員が爆笑に包まれる。

暗転。

おわり

※参考文献

『ブラジャーをする男たちとしない女』

著者…青山まり 新水社刊

